

Fate/I am sword

雜種48号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ーこの体は原初の剣で出来ていた

改変、とまではいきませんが元の話を強引に捻じ曲げている所やオリジナル設定が追加されていたりします。

それでも大丈夫な方はどうぞご覧あれ、これは原初の地獄が、一人の女神に捧げる物語

目次

プロローグ	1
鈍感系主人公だと思つた？ 当たりだ	
5	
おお乖離剣（エア）よ、地雷を踏むとは情けない	10
第一回カルデア放送	18

プロローグ

仄暗い冥界の空で、母なる神テイアマトとの戦いが終わりを告げようとしていた。いや、正確に言うなれば、幕を引こうとしていた。かの黄金の王の手によつて。

冥界からの永続的な攻撃と、諦めることを知らない英霊たち。花の魔術師もその枠に入れるべきだろうか。まあ、ようは彼ら彼女らのおかげで英雄王は時間を得たのだ。

そう—————

「起きろ、エア」

「この我をたたき起こす時間を、だ。」

「裁きの時間だ」

廻れ、廻れ、廻れ。その輪は天を、地を、冥界を指し示す我自身。

「世界を裂くは我が乖離剣！受けよ！」

我こそは原初の地獄そのものである。神も人も、星でさえも飲み込む乖離の剣である。

さあ、ギルガメッシュ小さき王よ！今こそ我が力の一端をその眼に焼き付けよ！

『天地乖離す開闢の星』!!』

我が力の奔流は空を裂き、次元を歪め、世界を削り、目標である醜き獣へと向かつて行く。概念ですら、我の前では意味を為さない。総ての原初はそれをも破壊して見せよう。

『哀れな女神よ。願わくば、次は何者からも自由であれ』

古代バビロニアを滅ぼさんとしていた獣は、一切の抵抗を許される間もなく消滅した。

それが当たり前であつたかのように。

最初から、存在自体がなかつたかのように、だ。

ああ、哀しき女神ティアマトよ。愛した子供らに拒絶され、最後まで理解させることもなかつた白亜の神よ。貴様の魂に、幸多からんことを。

『……これで良かったのか、ギルガメッシュ小きき王』

「此度の戦いにおける助力、感謝する」

『なに気にするな。我も永い間何もしいでは体が鈍るからな。丁度いい運動になった
さ』

「これを『丁度良い運動』と言うか!? 英霊どもが聞けばどうなるか分かったものではない
な!」

それもそうなのかも知れない。まあ、我と英霊とではそもそも存在からして違うんだ
から、劣等感を持つ必要はないんだけどな。

「しかし乖離劍エよ、貴様が重い腰を上げるのは珍しい。我オレが思うに、本当はなにか別に理
由があつたのではないのか?」

『ないな、我が出張つたのは単なる気まぐれに過ぎない。断じてエ總レシユキガルた女に自分
をアピールしたかつたとか、そういう事はない!!』

「そういえば先ほどエレシユキガルに会つたのだがな、貴様に礼が言いたいとー」

我はギルガメッシュ小きき王の手のひらから瞬時に離れ、ヒトのカタチを型取る。愛に生きるとい
うのはああ、確かに楽しいものだ。

「エレシユキガル! どこだエレシユキガル!? 我と一緒に夕食を食べよう、その後はウル
クでしょつぴんぐしよう! 無論、代金は我が持つ!!」

誰かが小さい声で呟いたような気がした。

「神でさえ恐れた乖離剣が冥界の女神に恋とは。全て遠き理想郷に戻る前に、面白いものが見れたね」

しかし見ろ、夕陽を受けたエレシユ嫁キガルは世界で一番キレイだぞ!!

鈍感系主人公だと思つた？ 当たり前だ

唐突だが、我には好きな奴がいる。ギルガメッシュユ 小さな王が宴会で羽目を外し、楽器を冥界に落とした時に出会つたんだ。

彼女を形成するそのカタチに惚れた。

人を愛し、魂を尊び、死後を護る。しかし己が生を謳歌することは叶わず、太陽を見ることも許されない。

そんな中虚ろな瞳で、しかし確固たる意思を持つて自身の役割を全うしようとする彼女は、我にはとても哀しいものに見えた。はかないものに見えた。

そして何より、とても愛おしく、守りたいものに見えたのだ。

世界を見せてやりたい、始まりの陽の光や闇に輝く星々、そして彼女自身が愛してきた人々の笑顔を。

あわよくば一緒にウルクを散歩して小柄なエレシユキガルと手を繋ぎたい。お昼には、ご飯を食べて膨らんだ彼女の頬を見て癒されたい。

夕陽を背景に私の想いの丈を伝えて結ばれたい。

つと、少し本音が出てしまったか。まあ良い、何を思うにしてもまずエレシユキガル

をでえとに誘わないとな。

そう云えば、ギルガメッシュ小さき王はイシュタルに告白されたことがあると言っていた。協力を頼むのもまた良いかもしれん。あとはそう……カルデアのマスターとその取り巻きにも後で声を掛けるとするか。

エレちゃん探して三千里。冥界を歩いていると、小さい女の子ことエレシユキガルが見えた。

体を上下に揺らしている、可愛い。体と一緒に彼女の髪も揺れている、さらに可愛い。不味いな……それは我にとって狂気たりえる。

ああ、ずっとこの景色を楽しみたいものだ。言っても仕方のないことではあるんだけど。

「エレシユキガル、冥界からのサポートは助かった。ありがとう」
「貴方に言われるとお世辞にしか聞こえないわよ……」

確かにそうかも知れないな。我、世界を創った剣だし。原初の地獄の体現だし。

ティアマトには申し訳ないが、彼女もまた我の敵と呼べるほどのものでは無かった。これは傲慢でもなければ自信過剰でもない、そういうふうに出てくるのだから。

「すまない。しかしまあ、我はともかく英霊たちの、何よりギルガメッシュの助けになったのは事実だ。感謝する」

「べつ別に私はあの金ぴかのためにやったわけじゃないんだから!!仕方なく手を貸したのよ、仕方なく!」

何の前触れもなく声を荒げるエレシユキガルか、これもまた乙だな。可愛い。

しかし、じつとエレシユキガルを見つめる我一抹の恥ずかしさが芽生えたのか、彼女は露骨に話題を変えてきた。

「それにしてもエア、貴方は金ぴかから離れてもいいの?」

我は我として一個体であるし、そもそもサーヴァントとは原点からして違うのだが。とにかく今はでえとだ!エレシユキガルをでえとに誘わなくては。

「ギルガメッシュ小きき王は問題ない。我はお前に用があつて来たんだ」

冥界の女神が少し驚いたように息をのんだ。そんな少しの仕草さえ可愛いと思つて

しまう我は、かなり重症なのだろう。

なにかを思いついたのか、エレシユキガルは我を見て小悪魔めいた笑みを浮かべた。

「そう。あれかしら、貴方は私をデートに誘いたいんでしょう?」

今度は我が驚きを隠せなくなる番だった。

なぜ分かった、エスパーなのかエレシユキガル!?可愛い。

「ねえそうなんですよ。いいのよ気にしなくて」

この誤魔化すのは得策ではない。むしろ今だからこそ、エレシユキガルをでえとに誘うチャンスなのではないか。覚悟を決めろ、我。

「貴方の気持ちは十分わかって「……エレシユキガル、聞いてほしい。大切な話だ」えっ?」

誰かの嘆息が聞こえたような気もするが今はどうでもいい。

「お前の言った通りだ、エレシユキガル。我はお前をでえとに誘いに来たんだ」

「え、ちよつと待って!?えっ!?リハと違うんですけど、違うんですけど!!」

「なにを言っているんだエレシユキガル、お前の言っていた通りだ。まあ本当は隠しておきたかったんだけどな」

エレシユキガルの慌てる姿もまた可愛い。なぜ慌てるのかは知らんが。

「明日の昼時に迎えに来る。楽しみにしていてくれ」

言いたいことは言い終えた。我は、みんなにでえとのアドバイスをしてもらおう、そうしよう。

「また明日だエレシユキガル、明日お前に告白するからな。気楽に待て」

それにしても忙しくなるぞ。服は王の財宝からパクるとしてだ、プランを練らなければ。ああ、やることが多過ぎる!!

「え?! 私デートに行くの!?! それで告白されるの!?! それもあの乖離剣につ!! そんないきなりああでも嫌ってわけじゃないのよ!?! ただ急な話につていけなくて…… ああもう!! 私ったら一人で何言ってるのかしら」

未だ状況を飲み込めない女神が一人。そして、それを見てイイ笑顔を浮かべる女神が一人いた。

おお乖離劍（エア）よ、地雷を踏むとは情けない

恋愛相談といつても、実際どうやて話を切り出せば良いんだ。

いろいろと自分が他の者よりも優れているつぽいことを言いはしたが、恋愛に関して言えば我は確実に素人もいいところだろう。

そして何より、ギルガメッシュ小さき王らに相談するのが恥ずかしいというものもある。

……だが、自身の考えだけを何の疑いもなく信じられるほど我は自信過剰ではない。

しかしギルガメッシュに相談なぞすれば、奴は大笑いすることだろう。『原初の地獄が色恋とはな！』みたいな感じで。

やはりここは姉妹神であるイシユタルに話すべきか？ いや、論外だったか。
奴こそギルガメッシュ小さき王と共に我を笑うのだろう。

なんだ、急に奴らに対する黒い気持ち湧いてきたぞ。殺してやろうか。

まあ今はそんなことを考えている時ではないな。カルデアのマスターとそのサーヴァントに相談するのが一番か。

あのマスターはいつも女に囲まれているからな。
よし、そうと決まれば早いに越したことはない。早速聞きに行くとするか。

カルデアのマスターの拠点の前で、取り敢えずは深呼吸だ。

まずは我がなにてあるか、そこから説明しなくてはならないのだからな。話し合ハナシいは長くなろう。

扉をたたく。最初に誰が出てくるかで、私の今後の対応も変えなくてはいけないからな。

「ギルガメツシュ王の縁者だ、少しカルデアのマスターに話したいことがあつて来た」
静かに扉が開いた。彼らの拠点の中に入ろうとして、私は巨体の者にぶつかつた。謝罪しようと思ひ、顔を上げた先にいたのは我も知っているものだった。

「……ッバーサーカー!! 貴様がなぜここにいる!？」

次いで、背後からカルデアのマスターがやって来た。なるほど、バーサーカーは彼のサーヴァントだったという訳か。

しかしまあ、かなり驚いたことは認めよう。バーサーカーはあのギルガメッシュ王をもつてして、勝ちを取れるかもしれない男だったのだから。

「驚かせたらごめん。ヘラクレス、先に戻っててくれ」

バーサーカーがマスターの命令に従い戻っていく。その光景を後目に我も返事を返す。

「気にするな、我の不注意だ」

「だったら良かった。ウルク of 兵士の人でもヘラクレスを怖がる人は結構いたからな」
確かに、あの巨体にあの人相では怯えもしよう。

それにしてもヘラクレスとはな……これも因果か何かか。まあ、我のギルガメッシュのではなく、ギルガメッシュの縁だな。

「そういうえげささ、ギルガメッシュの知り合いつて言つてたけど。また何かあつたのか？」
思案は一瞬。正直な話、そうだと言つてしまえば随分と話は楽に進むだろう。

しかしそれでは本末転倒だ。おそらく我は、本題を出せずに話を終えてしまうからな。

「いや、違う。我個人の話だ。少し君と、君のサーヴァントに相談したいことがあつてな」

さて、羞恥に打ち勝つ時だぞ。その手にエレシユキガル嫁を掴みたいと言ふのならば!! 「ギルガメツシユ王やイシユタルには話せないことなのだが…頼まれてはくれないかな?」

カルデアのマスターの顔はどうだ、余りにも想像と違うらしいのか開いた口が塞がらないようだった。

まあ、もし我が同じ立場にいれば、間違ひなく同じ反応をしただろうが。

「……とりあえず入れよ」

「助かる」

このマスターのもとに光の御子がないことを願うばかりだ。いや、マジで。

中に入ると、先ほど見たバーサーカーの他に、ギルガメッシュ小なき王に謁見していたシールダー、
 だったか？とかいうエクストラクラスの少女。それ以外にも数人のサーヴァントがい
 た。

青タイツの男がいないのは良いことだ。我の心の安寧が保たれる。

「話を聞いてくれて助かった。さすがはいつも女に囲まれているだけはある」

「なんかお前ギルガメッシュに言われたのか？言葉の端々がキツイんだが」

にしても、よくこんなに多くのサーヴァントを扱えるものだ。

我の知っている英霊はあまりいないようだが。

「気のせいだ。もし気になると言うのなら、それは君の器が小さいことの証明だよ」

少し言い過ぎたようにも思えるが、此方の方が存外やりやすかったりする。

なにより、彼のサーヴァントの反応を見るには、このぐらいでなくては意味がないだ

ろう。我の恋愛相談の今後にも影響が出てくる。

反応が大きければ大きいほど、色恋沙汰に詳しいとか何処かのうイッシュタルつかりんが言ってい

た気がする。

「それよりも、早く本題に入らせてくれ。我にも時間というものがあるんだ」

取り敢えず、できるだけのことはやって見たが……おっと、さつそく一人釣れたようだな。私の頭に剣を突きつけるとは。

命知らずではあるが、余程この男を大切に思っているのだろう。良い恋愛相談もできそうではないか。

「カルデアのマスター、君のサーヴァントは客人に武器を向けるのが礼儀正しいとでも思っているのか？」

しかし実際のところどうなのだろうか。我は考えざるを得ないぞ。

いくら想い人が貶されているとはいえ、普通人に刀剣の類を向けるとは考え難い。嫌な予感があるが、今更キャラを変えるのも違っている気がする。

つまり、ここは気がついていないふりをするのが最適解。

「貴方の方こそ、おかしいのではないですか？尋ねる側、まして相談をしようとしている者の言葉とは思えませんね」

いやあ、まさしくその通りだと思ふよ我も。

それにしても初対面の客に剣を向けるのはどうかと思うがな。不敬極まるぞ、とまあ思ったり思わなかったり。

「我は今、彼と話しているのだ。割って入るのは如何なものかと思うぞ、」

カルデアのマスターがオロオロしているぞ。相談に乗るつもりが、いきなり修羅場の

ようになってしまつては仕方のないことではあるのだろうか。

そして周りのサーヴァントからの視線が痛い。このマスター、無自覚にふらぐとやらを乱立させているのだ、きつと。

「みんな、いったん落ち着いてくれ。あとジャンヌ、その剣を降ろして」

ほう、あのめんへら女はどこぞの聖女だったか。

……
実はオルタ化しているのではないか？ 目がおかしな輝きを放っている気がする。まあ我には関係のない事柄だがな。

とりあえず、カルデアのマスターに同情でもしておくとするか。

フランスの聖女、ジャンヌ・ダルクが仄暗い表情でカルデアのマスターを眺めていたが、我はなにも見ていない。

そう、なにも見てはいなかった。

第一回カルデア放送

カルデア放送、それは私がなんか設定回みたいなものを作りたいと思って考え付いた、実にお粗末なこの作品内におけるカルデアの情報をお届けするコーナーです。

毎回（次があるとは言っていない）、違うゲストの方をお呼びしていきたいと思っております。

それでは記念すべき第一回カルデア放送のゲストはこの方!!

乖「宝具を打つ度に名前を言うのが、恥ずかしいと思いついた我である」

カ「人理修復をやらせてもらってます、カルデアのマスターです」

ぶつ壊れサーヴァントじゃない系最強純愛我様主人公のエアさんと、なんかメインサーヴァントでヘラクレスを使っている二次創作（FGOに限る）を見たことなかったのじゃあ自分でやればいいのかと思つて出来上がった魔力底なし系鈍感マスターの、名前はまだ考えてない人です。

カ「いや名前考えてないって!?普通に藤丸立花でいいじゃないか!!」

乖「さてカルデアのマスター。この男のことだ、名前なぞ付けた日には目を塞ぎたくなること間違いなしだぞ」

私は中二病ではありませんが、流石に人の名前で遊ぶことはしませんよ！

それに、カルデアのマスターの名前を藤丸立花にしないのはちゃんとした理由があるんです。

カ「なんだよ、理由つて。俺だつて自分のサーヴァントに名前で呼ばれてみたいんだぞ!!」

そうですねえ、好きな娘には名前で呼んでほしいですもんね。

乖「ほう、好きな女子おなじとは！誰だ誰だ」

まあ書きませんけどね、このネタはもう少し引つ張らせてください。それよりも大事なことがあるんですよ。

これはさっきのぐだ男の名前の件と関係があることなんですけど。

乖「確かに話のネタがすぐに割れてしまつてもつまらんよなあ、赦す」

カ「この人、やつぱりかなりの性格してるよ。ギルガメッシュ王と喋り方が同じなんだが」

乖「カルデアのマスターよ、いい眼をしているではないか。私の口調はまさしくギルガメッシュ小さき王を真似たものよ」

そろそろ話を戻してもいいでしょうか、つてか戻します。

カ「作者の強制権コワイ」

乖「まあ中の人がい s s ——グハア」

では話を戻します。

まず最初にこの二次創作内のカルデアの説明をさせていただきます。

ゲームと設定は一緒です。はい、それだけです。しかし、少し付け加えたいというか、お知らせしていきたい部分があります。

まず第一に、ぐだ男のサーヴァントは私のカルデア内からよく使うものを選出して話に登場させます。

そのため、この寒い時期に水着信長が出てくるかもしれないし、どこかでサヨナラしたジークフリートが出てくるかもしれないし、どこかでサヨナラし

そして第二に、ヘラクレスはどんな特異点でも一緒です。相性不良とかは、意識はしますがあまり考えないでいただけると助かります。

第三に、ぐだ男の名前を藤丸立花にしない理由ですが、それは上記の内容に関わって

きます。

私のカルデアには、アルジュナがいます。

fate/goのアニメを見た方なら気付いたでしょう。そうです、声優声が同じなので
す。

だから藤丸立花は却下とさせていただきました。

乖「……長いぞ!!我はこの間にエビフ山に三回は行って来れたな」

カ「俺はワンワン王にボコられたとこだけだな」

貴様らになにが分かる!?我々作者が財布を絞り切つて手に入れた鯖をなんの前触れもなく手に入れたり、種火も素材集めもしないクセにいつの間にかレベルマスキルマになつてたり!!

果てには!絆なんていつの間にか十になっていやがる!!これを理不尽と言わずして
なんと言う!?

乖「どうした作者、気でも触れたのか?」

カ「ああ、確か今ヘラクレスの絆上げにエビフ山に潜つてゐるって……」

アアヤツトキズナハチマデキタゾアトハンブンダアゝアハハハ

ちなみに、私は元々sn勢でした。ゲームは必要最低限の育成して好きな鯖だけを育

てる初心者エンジンジョイ勢です。

乖「いきなり素に戻るな」

カ「今回は終わりにしとこう、そうしよう」

ふむ、確かに疲れましたからね。

それではみなさん、また次回のカルデア放送をお楽しみに！